

第三章 藤壺の物語 (二) 二月に男皇子を出産

[第一段 左大臣邸に赴く]

(朝賀を終えて源氏が、)内裏より大殿にまかだたまへれば、例の(正妻はいつものように)うるはしう(整然と)よそほしき御さまにて(身構えた態度で)、心うつくしき(愛想を作る)御けしきもなく(様子も無いので)、苦しければ(気詰まりで)、

「今年よりだに(今年からでも)、すこし世づきて(少しくだけて)改めたまふ御心見えば(改まった態度になれば)、いかにうれしからむ(どんなに嬉しいでしょう)」など聞こえたまへど(などと源氏が申し為されても、左大臣家の姫君は)、

「わざと人据ゑて(源氏がわざわざ二条院に女を住まわせて)、かしづきたまふ(大切にお世話なさる)」と聞きたまひしよりは(との噂をお聞き為されては)、「やむごとなく(その女を最愛の妻として)思し定めたる(御決めになった)ことにこそは(上での事に違いない)」と、心のみ(心をいっそう)置かれて(閉ざして)、いとど疎く(ひどく不機嫌で)恥づかしく(居た堪れない)思さるべし(お気持ちの様でした)。

(然し其れを口にして源氏を咎め立てする事は自尊心の高さが許さないらしく、左大臣家の姫君は)しひて見知らぬやうにもてなして(敢えて知らん顔をしていて)、乱れたる御けはひには(相好を崩す源氏の戯れには)、えしも心強からず(さすがに無視するほどの強情は張らず)、御いらへなど(相槌などを)うち聞こえたまへるは(少し申しなさるのは)、なほ(さらに)人よりは(普通の人とは)いとことなり(随分違っていました)。

四年(よとせ、四歳)ばかりが(ほど)このかみに(姫は源氏より年上で)おはすれば(いらしたのを)、うち過ぐし(気にして)、恥づかしげに(恥じていたが)、盛りにととのほりて見えたまふ(女栄えは見事に備えて居らした)。

「何ごとかは(何処かに)この人の(姫君の)飽かぬところは(欠点が)ものしたまふ(在るだろうか、否在りはしない)。我が心の余り(あまり、度を越した)けしからぬ(不倫の)すさびに(身勝手さに)、かく怨みられ(こうして怨まれて)たてまつるぞかし(しまっているのだろう)」と、思し知る(と源氏は御思いに成る)。

同じ大臣と聞こゆるなかにも(右大臣と比べても)、おぼえやむごとなくおはするが(左大臣は帝の御信任が厚く)、宮腹に一人(帝の妹宮との間に一人設けた姫君を)いつき(大事に育て)かしづきたまふ(お世話しなされたので)御心おごり(姫の気位の気負いは)、いとこよなくて(大変に高く)、
「すこしもおろかなるをば(少しでも軽んじる持て成しは)、めざまし(許せない)」と思ひ(と知っているのを)きこえたまへるを(お知りにはなったが)、男君は(姫の夫たる源氏は自分自身が帝の御子という身分の高さなので)、「などかいとさしも(何も其処まで、仰々しくしないでも良いだろうに)」と、習はひ給ふ(ならはいたまふ、平易に應對なさるので)、御心の隔てどもなるべし(互いの気持ちは行き違ってしまおうのだろう)。

大臣も、かく頼もしげなき御心を(源氏の浮気を)、つらしと思ひきこえたまひながら(辛く思い申しなさりながら)、見たてまつりたまふ時は(実際に源氏と御会いになるときは)、恨みも忘れて、かしづき(甲斐甲斐しく)いとなみきこえたまふ(御世話申し上げ為される)。

つとめて(翌朝)、出でたまふところに(源氏のお帰りに)さしのぞきたまひて(岳父なる大臣が顔を御見せになって)、御装束したまふに(源氏が身支度なさる時に)、名高き御帯(最上級の帯を)、御手づから持たせて(御自分でお持ちになって)わたりたまひて(お渡り為されて)、御衣のうしろひきつくろひなど(後姿を手直しなさったり)、御沓(おんくつ、履物)を取らぬばかりに(を揃えて差し上げようかとさえ)したまふ(為さりそうで)、いとあはれなり(大変なお氣遣いだった)。

「これは、*内宴(ないえん)などいふことも(などが行われるという事も)はべるなるを(在るでしょうから)、さやうの折にこそ」など聞こえたまへば(と源氏が申しなさると)、 *「内宴」は<内祝>の意だろうが、特に<<正月 20 日ごろの子(ね)の日に仁寿殿(じじゅうでん)南廂(みなみびさし)に天皇が出御、公卿以下文人を召して詩文を作らせ、また酒宴を催した。(Yahoo 辞書)>>という行事らしい。

「それは(その時には)、まされるもはべり(またもっと善い物が御座います)。これはただ目馴れぬさま(珍しいもの)なればなむ(だったもので)」とて(と言って大臣は)、しひて(そのまま)ささせ(締め付け)たてまつりたまふ(申し上げ為される)。

げに(実に)、よろづにかしづき立てて(どんな事でも源氏のお世話を)見たてまつりたまふに(して差し上げなさる事に)、生けるかひあり(大臣は生甲斐を得て)、「たまさかにても(たとえ稀にでも)、かからむ人を(これほどの人を)出だし入れて(いだしいれて、送り迎えて)見むに(面倒を見る事に)、ますことあらし(勝る慶びは無い)」と見えたまふ(と見えなさる源氏の見映えなので御座いました)。

[第二段 二月十余日、藤壺に皇子誕生]

参座(さんざ、年賀に参列)しにとても(するといっても)、あまた所も(多くの所へは)歩きたまはず(お出掛けにならず)、内裏(うち、父帝の御所)、春宮(とうぐう、兄宮の皇太子御所なる東の坊)、*一院(いちのあん、朱雀院)ばかり、さては(その他には)、藤壺の三条の宮にぞ参りたまへる。 *<<「一院」について、『集成』は「上皇のこと。朱雀院で算賀を受けられた方であろう」と注す。『完訳』は「ここだけに見える呼称。巻頭の行幸はこの一院の賀。上皇が二人存在する場合、先に上皇になった方を「一院」、後の方を「新院」と呼ぶ。桐壺帝の一代前の帝(新院)は兵部卿宮や藤壺の父で、すでに崩御。この一院は桐壺帝の父か」と注す。>>と注釈に在る。

「今日はまた殊にも(ことにも、特に美しく)見えたまふかな(お見えです事)」

「ねびたまふままに(年を追って)、ゆゆしきまで(怖いほど美しく)なりまさりたまふ(なってしまうられる)御ありさまかな(御姿です事)」

と(などと)、人びとめできこゆるを(女房たちが源氏を讃え申すのを)、宮(藤壺宮は)、几帳の隙より、ほの見たまふにつけても(少し御覧になりながら)、思ほすこと(お考えになる事は)しげかりけり(色々とお在りでした)。

この御ことの(御出産が)、師走も過ぎにしが(無いまま十二月が過ぎて)、心もとなきに(皆心配して)、この月はさりともと(この月こそはと)、宮人も待ちきこえ(宮邸挙げてお待ち申し上げ)、内裏にも、さる御心まうけどもあり(そのようにお心積もり為されていたが)、つれなくて立ちぬ(そのまま一月も過ぎ去りました)。

「御もののけにや」と、世人(よひと、世間の人々)も聞こえ騒ぐを、宮、いとわびしう、「このことにより(このお産で)、身のいたづらになりぬべきこと(死んでしまうかもしれない)」と思し嘆くに、御心地もいと苦しくて(気分がひどく重苦しくて)悩みたまふ(塞ぎ込まれた)。

中将君は(ちゅうじゃうのきみは、中将の源氏は)、いとど思ひあはせて(はっきりと思い当たったので)、御修法など(みずほふ、出産祈願の読経を)、さとはなくて(事情は伏せて、知人平癒などと願い立てて)所々にせさせたまふ(幾つかの寺に上げさせ為された)。

「世の中の定めなきにつけても(この世の無常を思えば)、かくはかなくてや止みなむ(このまま召されて終わってしまうのだろうか)」と、取り集めて嘆きたまふに(と不安を募らせる内に)、二月十余日のほどに(きさらぎのじゅうよにちのほどに、二月十日過ぎに)、男御子生まれたまひぬれば、名残なく(思い過ぎしも消えて)、内裏にも宮人も(御所も三条宮邸の人々も)喜びきこえたまふ(皆お喜びでした)。

「命長くも(まだ死にたくない)」と思ほすは(と思うのは)心憂けれど(帝を裏切った大罪の前には未練がましく見苦しくも思えたが)、「弘徽殿などの、うけはしげに(敵を呪わしく)のたまふ(念じている)」と聞きしを(と聞いて)、「むなしく聞きなしたまはましかば(敵の思い通りに死んでしまつては)、人笑はれにや(笑いものにされてしまう)」と思し強りてなむ(と母の強さで気を奮い立たせて)、やうやうすこしづつ爽やい(さはやい、産後の肥立ちを回復)たまひける(為されました)。

主上の(うへの)、いつしかと(早く御子を御覧になりたいと)ゆかしげに(我が子との縁を愛しく)思し召したること(お思い為さることは)、限りなし(この上ない)。

かの(そしてまた)、人知れぬ御心にも(人知れず実の我が子との縁を愛しく思う源氏も)、いみじう心もとなくて(どうにも落ち着かない気持ちで)、人まに(人の少ない時を狙って)参りたまひて(三条宮邸にお参り為されて)、

「主上のおぼつかながり(お上が早く御子に会いたいと)きこえさせたまふを(仰って御出でなので)、まづ見たてまつりて(先ず私がお目にかかって)詳しく奏しはべらむ(御子の御様子をお上に詳しく御報告申し上げようと、存じまして)」と聞こえたまへど(と申されたが)、

「むつかしげなるほどなれば(生まれ立てで見苦しいので)」とて(と言って)、見せたてまつりたまはぬも(藤壺宮が源氏に御子を会わせなさらなかったのも)、ことわりなり(尤もだった)。

さるは(というの)、いとあさましう(全く驚いた事に)、めづらかなるまで(珍しいほど)写し取りたまへるさま(源氏に生き写しの御子のお姿は)、違ふべくもあらず(紛れも無く其の血筋を示していた)。

宮の、御心の鬼に(良心の呵責に)いと苦しく(苛まれて)、「人の見たてまつるも(王命婦や中納言の君の見立てでも)、あやしかりつるほどの(怪しむほどの)あやまりを(源氏との逢瀬での過ちを)、まさに人の思ひ(きっとみんな気付いて)とがめじや(非難することだろう)。

さらぬはかなきことをだに(何でも無い事できえ)、疵を求むる世に(他人の粗探しに躍起となるこの世の中で)、いかなる名の(どんな汚名を)つひに(最後には)漏り出づべきにか(着せられる事になってしまうものやら)」と思しつづくるに(と思い巡らせば)、身のみぞ(我が身の程が)いと心憂き(本当に情けない)。

命婦の君に(王命婦に)、たまさかに逢ひたまひて(源氏が偶々御会いになると)、いみじき言どもを尽くしたまへど(切々と言葉を尽くして宮との逢引を頼み込まれても)、何のかひあるべきにもあらず(命婦は一切応じなかった。また)。若宮の御ことを、わりなく(どうしても)おぼつかながり(見てみたいと)きこえたまへば(御話し為されると)。

「など(なぜ)、かうしも(こうまでも)あながちにのたまはすらむ(無理を仰せなのでしょう)。今(程なく)、おのづから(自然に)見たてまつらせたまひてむ(御会いなされる事でしょうに)」と聞こえながら(と答えながらも)、思へるけしき(源氏の真意を)、かたみにただならず(知らない命婦では無かった)。

かたはらいたきことなれば(然し源氏はさすがに後ろめたく)、まほにも(正面切っては)えのたまはで(とても口に御出しに為れず)、「いかならむ世に(何時になったら)、人づてならで(私は若宮と直接)、聞こえさせむ(お話し出来るのだろう)」とて(と言って)、泣いたまふ(お泣きあそばす)さまぞ(源氏の姿は)、心苦しき(命婦には心苦しかった)。

「いかさまに昔結べる契りにて、この世にかかるなかの隔てぞ (和歌 7-3)

「如何なる前世の因縁が、現世の溝に横たわる (意識 7-3)

かかることこそ心得がたけれ(どうしても其れが分からない)」とのたまふ(と源氏は言いなさる)。命婦も、宮の思ほしたるさまなどを見たてまつるに(藤壺宮が悩んでいる姿を見受け申ししたので)、えはしたなうも(ただの不埒と)さし放ちきこえず(とても突き放せない)。

「見ても思ふ見ぬはたいかに嘆くらむ、こや世の人のまどふてふ闇 (和歌 7-4)

「逢えない夜が辛いのと、言う仲に成った秘めた夜 (意識 7-4)

*注釈には≪命婦の藤壺に代わって源氏への返歌。「この世」を踏まえて「こや世の人」と返した。「見ても思ふ」の主語は藤壺、「見ぬはたいかに嘆くらむ」の源氏をさす。「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に惑ひぬるかな」(後撰集雑一、一一〇二、藤原兼輔)を踏まえる。≫とある。先に引歌を見ると「人の親の(親心は)心は闇に

あらねども(物知りでも、悪意は無くても)子を思ふ道に(子育てには理性を欠いて)惑ひぬるかな(道を示せない、道を誤る)」と読める。そこで是を踏まえると、後節は「こや(是が)世の人の(世の親の)まどふてふ聞(犯す過ち)」となる。そこで何が後節の「是」なのかを前節を見ると、「見ても思ふ(見守っていても気掛かりで)見ぬはた(会えなければいっそう)いかに嘆くらむ(心配で為らない)」となる。通せば<子育てには心配の種が尽きない>という引歌を準ただけの表面となっている。然し前節の「見る」対象が<若君>ではなく<恋慕の相手>であり、後節の「世の人」が<世の親>ではなく<情交する男女>だとすれば、この歌は<適わぬ恋に溺れるのが色の道>という年増らしい艶の濃い言い回しになっている。

あはれに(儘ならず)、心ゆるびなき(心休まらぬ)御ことどもかな(方々ですね)」と(と命婦は)、忍びて聞こえけり(声を潜めて申し上げた)。

かくのみ言ひやる方なくて(こうして如何にも成らないまま)、帰りたまふものから(源氏はお帰りに成るものの)、人のもの言ひもわづらはしきを(藤壺宮は源氏とどんな噂が立つのかが気掛かりで)、わりなきことに(二度と源氏との逢瀬は重ねないと)のたまはせ思して(心に誓って)、命婦をも(命婦に対しても)、昔おぼいたりしやうにも(昔懐いていた様には)、うちとけむつびたまはず(心を開いて親しく為さることも無かった)。

人目立つまじく(宮は目立たぬように)、ならだかにもてなし(穏やかに応対して)たまふものから(いらしたが)、心づきなしと(妙婦に対して気を許せない)思す時もあるべきを(御思いに為る時も在るようなのが)、いとわびしく(命婦はとても辛く)思ひのほかなる心地すべし(思ってもみなかった事のように)。

[第三段 藤壺、皇子を伴って四月に宮中に戻る]

四月(卯月うづき)に内裏へ参りたまふ(藤壺は四月になって若宮を連れて参内為された)。ほどよりは(若宮は二ヶ月の割には)大きにおよすけたまひて(大きく成長なさって)、やうやう起き返りなどしたまふ(次第に寝返りなども為さる)。

あさましきまで(呆れるほどそっくりで)、まぎれどころなき(紛れも無い)御顔つきを(源氏似の若宮の顔つきを)、思し寄らぬことにしあれば(帝は真逆に其うとは思寄らない事だったので)、「また(やはり)ならびなきどちは(出来の良い子供同士は)、げに(このように)かよひたまへるにこそは(似ているものなのか)」と、思ほしけり(と御思いになった)。いみじう思ほし(帝は若宮を大切に御思いになり)かしづくこと(可愛がられる事)、限りなし(この上ない)。

源氏の君を、限りなきものに思し召しながら(最愛に御思いになりながら)、世の人の(母方の後見が得られないので、世間が)許し聞こゆまじかりしによりて(認めそうも無かったので)、坊にも(源氏を皇太子に)据ゑたてまつらずなりにしを(座らせられなかったのを)、飽かず口惜しう(帝は心残りで情けなく)、直人にて(ただうどにて、臣下とするには)かたじけなき(勿体無い優れた)御ありさま(才知と)、容貌に(お姿に)、ねびもておはするを(成長した源氏を)御覧ずるまに、心苦しく思し召すを(少しでも報いたいと御思いになっていた所に)、

「かう(この藤壺の)やむごとなき御腹に(高貴な宮腹に)、同じ光にて(源氏と同じ輝きで)さし出でたまへれば(生まれ出でなされた若宮を)、疵なき玉」と思しかしづくに(と御思いになって慈しまれたが)、宮はいかなるにつけても(藤壺は余りある帝の若宮への愛着にも)、胸のひまなく(素直に喜べず)、やすからずものを思ほす(相済まなく沈みがちだった)。

例の(普段の催しで)、中將の君(中將である源氏の君が)、こなたにて(藤壺が住まう飛香舎で)御遊び(管絃の宴)などしたまふに(など為さっていると)、抱き出で(帝が若宮を抱いて御簾表に出て)たてまつらせたまひて(御出でになって)、

「御子たち、あまたあれど、そこをのみなむ(其方だけを)、かかるほどより(このような幼い時から)明け暮れ見し(毎日見ていた)。されば(それで)、思ひわたさるるにやあらむ(思い至るのかもしれないが)。いとよくこそおぼえたれ(この子は其方に本当に良く似ているものだ)。いと小さきほどは(こんなに小さい時は)、皆かくのみあるわざにやあらむ(皆このように似ているものなのだろうか)」とて(と言って)、いみじくうつくしと(とても可愛いと)思ひきこえさせたまへり(思って御出でのようで御座いました)。

中將の君、面(おもて、顔)の色変はる心地して、恐ろしうも、かたじけなくも、うれしくも、あはれにも、かたがた移ろふ心地して、涙落ちぬべし(涙が落ちそうだった)。もの語りなどして(何か言いそうに)、うち笑みたまへるが(笑いなさる若宮が)、いとゆゆしううつくしきに(この世の物とも思えぬほど可愛くて)、わが身ながら、これに似たらむは(之に似ているとは)いみじういたはしう(くれぐれも大事にしなければと)おぼえたまふぞ(思ったりしては)、あながちなるや(自惚れも過ぎるだろうか)。

宮は、わりなくかたはらいたきに(帝と源氏の遣り取りに気も漫ろで)、汗も流れてぞおはしける(冷や汗を掻いて居らした)。中將は、なかなかなる心地の(予期せぬ帝と藤壺を交えた若宮との対面にいつになく)、乱るやうなれば(気も動転して)、まかでたまひぬ(お帰りになった)。

わが御かたに(二条院東の対の自室に)臥したまひて(横たわりになって)、「胸のやるかたなきほど過ぐして(気分が収まったら)、大殿へ(左大臣家の正妻に会おうか)」と思す。御前(おまえ、手前)の前栽(せんざい、庭の植え込み)の、何となく青みわたれるなかに、*常夏のはなやかに咲き出でたるを、折らせたまひて、命婦の君のもとに(王命婦の所に届けさせなさる)、書きたまふこと(添え書きなされた手紙は)、多かるべし(長文であった)。*「常夏」は<撫子>の異名だが、色が書いて無い。「男御子」を想定すれば<白>かとも思うが、「紫のゆかり」でも有れば<薄紫>だろうか。「大和撫子」は<カラナデシコ>という品種で、花卉の先が細長くばらけて居る形状。そうか、初夏か。

「寄添へつつ見るに心は慰さまで、露けさ増さる撫子の花 (和歌 7-5)

「飾りじゃないとは知りながら、撫でし子をみる懐かしさ (意識 7-5)

*原文注釈によると、《源氏の藤壺への贈歌。『花鳥余情』は「よそへつつ見れど露だに慰まずいかがはすべきなでしこの花」(新古今集、雑上、一四九四、恵子女王)を指摘。「よそへつつ見る」は意味深長な表現。「撫子の花」を「若宮によそへつつ見る」、また「帝のお子と違って拝しているが、実はわが子であると思うと」。》、とある。

適注かと思う。ただ元々、「よそふ」が意を多く含む言葉で、「装ふ」なら<飾る><整える>とあり、「寄添ふ」なら近付けて関連付けて<託す><比べる>とある。また「露」は<涙><湿り気>を示すが、特に「露だに」と言えば<露ほども>なので<ほんの少し>の意味にも使う。従って引歌の詠み方自体が既に重層的となっていて、「よそへつつ(一緒に住んで、飾り立てて)見れど(育てても、みても)露だに(悲しみは、ちっとも)慰まず(癒されない、良くない)如何は為可き撫子の花」、と読める。後は何が「撫子」なのかの問題になるだけだ。源氏の歌は詠み方は引歌の踏襲だが、「撫でた子」がワケアリの<若宮>である所に趣向が在る、のか。歌としては本歌取りと言うより、盗作だろう。

*花に咲かなむ(花が咲いたら)、と思ひたまへしも(と書いていたが)、かひなき世にはべりければ(どうなる物でも在りませんので)」とあり。 *注釈は<歌に添えた言葉。『集成』『完訳』は「我が宿の垣根に植ゑし撫子は花に咲かなむよそへつつ見む」(後撰集、夏、一九九、読人しらず)を引歌として指摘。>とある。で、「花に咲かなむ(花に咲かせたい)の「に」だが、是は「よそへつつ見む(近くで育てて)」が在って初めて意味が通る変形かと思う。詰まり、「花に(寄添へつつ見む)咲かなむ」として<花にまでじっくり育てて咲かせたい>、と読む。だから「花に咲かなむ」を意識すれば<花が咲いたら>という気持ち、になる。更に是を<若宮が産まれたら>と言い換えても意味の上では良いのかも知れないが、敢えて其処までする意図は分からない。一般に「撫子」は幼子を指すらしいが、引歌の「撫子」は不明。ただ「我が宿」の「やと」が<家(や)>の<外(と)>という説明をどこかで見て、其れが全体に掛かる気がして興味深かった。

さりぬべき隙にやありけむ(ちょうど他に人が居ない隙があったので)、御覽ぜさせて(命婦は藤壺宮に文を御覧に入れて)、「ただ塵ばかり、この花びらに(せめて塵ほどの僅かでも、この手紙にお返事を)」と聞こゆるを(と申し上げると、宮は)、わが御心にも(ご自身でも)、ものいとあはれに(さすがに深い感慨を)思し知らるるほどにて(お覚えになって)、

「袖濡るる露のゆかりと思ふにも、なほ疎まれぬ大和撫子」(和歌 7-6)

「過ちに泣いて暮らしても、なほ罪は無い大和撫子」(意識 7-6)

*源氏の贈歌にある「露けさ増さる撫子の花」を受けて、藤壺は「袖濡るる露のゆかり」と返している。是は一寸した事件である。源氏は「撫子の花」を「若宮によそへつつ見」ていて「露けさ増」して<袖を濡らして>いた訳だが、藤壺は源氏が「撫子の花」に喩えた若宮を「大和撫子」と言い換えて、「袖濡るる」源氏の「露のゆかり」だと認めてしまっている。無論、源氏と藤壺の二人は当事者同士で分かり切った事では在っても、其れを歌として残してしまうのは危う過ぎる。確かに此れ位の色気が無いと話が面白くない、とは思いますが。それにしても大胆な。歌の字面は「どんなに涙を誘っても、大事にしたい大和撫子」で歌意も筋は変わらないが、内容は相当重い。即ち、「若宮は帝を欺いた貴方の子ですが、それでも大切な我が子です」と鬼気迫る。

とばかり(とだけ)、ほのかに(うっすらと)書きさしたるやうなるを(やっとならぬように)書いてあるようなものを)、よろこびながら(命婦は宮の久しぶりの打ち解けを喜んで)たてまつれる(源氏に返歌をお届け申した。)、例のことなれば(いつものように)、しるしあらかし(返事は無いだろう)」と、くづほれて(気弱に)眺め臥したまへるに(ぼんやり臥して居らした源氏は)、胸うち騒ぎて(宮の返事に胸躍らせて)、いみじくうれしきにも(喜びの余り)涙落ちぬ(涙した)。

[第四段 源氏、紫の君に心を慰める]

つくづくと臥したるにも(源氏は暫く物憂げに臥していたが)、やるかたなき心地すれば(遣る瀬無いばかりなので)、例の(また)、慰めには(気晴らしにでもと)西の対にぞ渡りたまふ(西の対の方へお渡りになります)。

しどけなく(寝癖で)うちふくだみたまへる(緩み膨れた)鬢ぐき(びんぐき、鬢髪)、あざれたる桂姿にて(崩した内着姿のまま)、笛をなつかしう吹きすさびつつ(横笛を気ままに吹き流しながら向かわれて)、のぞきたまへれば(部屋を窺うと)、女君(をんなぎみ、妻の座にある若草の君は)、ありつる花の(さっき見た撫子の花が)露に濡れたる心地して(朝露に濡れたかのように可憐に感じられて)、添ひ臥したまへるさま(脇息にもたれて座っていなさる姿が)、うつくしうらうたげなり(綺麗で可愛らしく御座いました)。

愛敬(あいぎやう、姫君は打ち解け顔)こぼるるやうにて(いっばいの顔付きだったが)、おはしながら(源氏が邸にお帰りになっても)とくも渡りたまはぬ(直ぐにはお渡り為されないのが)、なまうらめしかりければ(少し不満だったので)、例ならず(いつもと違って)、背きたまへるなるべし(源氏が顔を見せても背を向けたままでした)。端の方についゐて(そのまま姫は入口近くに座っていたので、源氏が)、

「こちや(さあおいで)」とのたまへど(と仰ったが)、おどらかず(立ち上がらず)、

「*入りぬる磯の」と口ずさみて(と古歌を口ずさみして)、口おほひしたまへるさま(袖で口を隠すしぐさが)、いみじうされてうつくし(悪戯心いっばいで可愛い)。*注釈に«『源氏積』は「潮満てば入りぬる磯の草なれや見らく少なく恋ふらくの多き」(拾遺集、恋五、九六七、坂上郎女)を指摘、原歌は『万葉集』。その第二句の文句。紫の君は、磯の草のように、逢うことが少ないという不満の気持ちを訴えた。»とある。引歌だが、先ず「潮満てば」とあって字面では<満潮になれば>で、意味としても其の儘で<満を持して>や<良い潮時で>と言い換えられるから、<準備万端整って愈々是からと言う時に>という気持ちを含む事は、今日の日常語としても理解できる。次いで「入りぬる磯の草なれや」とあるが、是が<入り江の海草>なのは自明だが、何が<海草>かといえ一般に海草は陰毛に見立てられ、<貝>が形状から<女陰>に見立てられて其の縁続きで<海草>は<若い女>と見做される。それが「草なれや」だから、<海草>は<自分なので>と言っていて、つまりは若い女の恋心の歌、となる。その<海草>が波に吞まれて「見らく少なく(見えずらくて)」「恋ふらくの多き(沈んでいる)」という情景に乗せて、「見らく少なく(逢えなくて)」「恋ふらくの多き(残念です)」と訴えている。通せば、「床の準備をしてお待ちしているのに、なかなかお見えにならなくて焦れています」という色っぽさ。姫が何処までの気持ちを込めたのかは定かでは無いが、この歌を下敷きにする素養は身につけていた、のだろう。サラッと受け止めるなら「待ってるのに、なかなか来ないんだから」くらいに考えるのも一興だろうが。

「あな、憎(おや小憎らしい)。かかること口馴れたまひにけりな(そんな口ぶりをするようにお成りか)。*みるめに飽くは(見飽きるほうが)、まさなきことぞよ(よほど愚かぞ)」*注釈に«『源氏積』は「伊勢のあまの朝な夕なにかづくてふみるめに人をあくよしもがな」(古今集、恋四、六八三、読人しらず)を指摘、現行の注釈書でも引歌として指摘。『集成』は「しよちちゅう逢ってるなんてお行儀の悪いことなのですよ」の意と注す。»とある。引歌は「伊勢の海人の(いせのあまの)朝な夕なに(あさなゆうなに)潜くて

ふ(かづくという)水松布に(みるめに、見る目に=会える日に)人を(ひとを、恋人を)飽く(あく、思う存分抱く)由もがな(よしもがな、事が出来たら良いなあ)」ということで、<朝でも晩でも布団に潜って女陰を玩んで遣り捲きたい>と言う明け透けな情欲を、伊勢の遠浅で長閑な入り江の風情と<みるめ>と言う言葉遊びに掛けて、洒落てみたという所だろうか。この注釈で「みるめに飽く」という言い回しの下敷きは一応理解できたが、姫が言った「入りぬる磯の」に対して源氏が「みるめ」と答える唐突さには戸惑うばかりだ。詰まり此の儘ではこの遣り取りが洒落た会話にならず、源氏が「みるめ」を持ち出すイヤラシサだけが強調されてしまう。ただしイヤラシサは情緒なので其れ自体は悪くないが、唐突さは優雅さに掛ける。と置いていたら、この辺の歌を Web 検索で少し調べる内に、「入りぬる磯の」の下敷きになった「潮満てば入りぬる磯の草なれや見らく少なく恋ふらくの多き」を本歌とする、「みるめこそ入りぬる磯の草ならめ袖さへ波の下に朽ちぬる(新古 1084)」という歌が「やまとうた」というサイトの二条院讃岐のページ(http://www.asahi-net.or.jp/~sg2h-ymst/yamatouta/sennin/n_sanuki.html)に紹介されているのを、目にした。此方の歌は直接「入りぬる磯の」の引歌を受けて、「見らく少なく恋ふらくの多き」とは言うけれど<磯の草ならめ><みるめ>の貴方の方<こそ><波の下>に<入りぬる(隠れていて会えない)>から私の<袖さへ><波(だ)の下>に濡れっ放しで<朽ちぬる>、ということで見事に「水松布」を登場させている。更に此の歌は<袖さへ>と言うのだから<袖>だけでなく、<みるめこそ><入りぬる><ならめ><波の下に朽ちぬる>ので、「隠れているばかりでは泣き暮らして老い果ててしまう」、と女を窺っている。だから此処でも知らん顔をして居る姫に「みるめにあくはまさなきこと(水松布のように隠れていては見苦しい)」と窺めた、のだろう。少なくとも其の複意は有ると見ておくべきだ。でなければ、源氏が野暮になる。

とて(と言うと)、人召して(源氏は係りの女房を呼んで)、御琴(おんこと)取り寄せて(運び込ませて)弾かせたてまつりたまふ(姫に弾かせようと為さりあそばす)。

「箏の琴(さうのこと、十三弦)は、中の(なかの、中でも)細緒(ほそを、手前の細い三本)の堪へがたきこそ(が切れ易いのが)ところせけれ(気に障る)」とて(と言って源氏の君は)、*平調(ひやうでう)におしくだして(琴柱コトジを押し下げて)調べたまふ(調弦なさる)。*「平調」は音名で「E」のこと、の由。ただ箏は曲に合わせて琴柱を動かして、其の曲の和音を固定する役割を持つ楽器で、合奏ではなくても曲毎に調弦するはずだ。だから「平調」をE音だとして、一番手前の細い絃をE音に決めたとしたら、全部の琴柱を其の曲に合わせて動かさなければならない。ただ現在の平調子(ヒラヂョウシ)音階がGm+4+9くらいに調弦される事も然程は当時の音階の当てとも思えない。応仁の乱で平安朝楽士は一旦途絶えたらしいから、当時のピッチも厳密には定かでない、らしい。それでも記憶の連続性を思えば、其処等辺を類推する他はないし、揺らぎを本質と見れば其処等辺で間違いない。つまりは正式の調弦より緩めた、と言う理解で十分なのだろう。それが寛いだ気分にも合致する。むしろ此処に敢えて「平調」と言う言葉を持ち出した作者の意図が気になって少し考えてみたが、結局分からない。ただ、当時の人がこの表現である程度の音感を感じたのかもしれない、とだけノートする。

かき合はせばかり弾きて(源氏が調弦の試し弾きをしてから)、さしやりたまへれば(姫君に御弾かせなさると)、え怨じ果てず(姫はすっかり機嫌を直して)、いとうつくしう弾きたまふ(とても上手に弾きなさる)。

小さき御ほどに(小さな体で)、さしやりて(左手を伸ばして)、ゆしたまふ御手つき(絃を押さえて音を揺らす姫の手付きが)、いとうつくしければ(とても可愛らしく)、らうたしと思して(構って遣りたくなつて)、笛吹き鳴らしつつ教へたまふ(源氏は笛を添えながらお教えなさる)。

いとさとくて(姫はとても賢くて)、かたき調子どもを(混み入った曲でも)、ただひとわたり(一度のおさらいで)習ひとりたまふ(覚え為さる)。大方(何でも)らうらうじう(一通りこなす)をかしき御心ぼへを(優れた姫の才能を)、「思ひしこと適ふ(思っていた通りだ)」と思す(と源氏は御思いになる)。

「*保會呂惧世利(ほそろぐせり)」といふものは、名は憎けれど(名は変だが)、おもしろう吹きすさびたまへるに(源氏が面白く笛を吹きなされると)、かき合はせ(姫が箏を流し弾いて)、まだ若けれど(拙いながらに)、拍子(はうし)違はず(合わせて)上手めきたり(そこそこ上手に出来たようだった)。 *曲名らしい。注に「高麗壺越調の曲」とある。分からない。

大殿油参りて(日が暮れたので明かりを燈して)、絵どもなど御覧ずるに(絵などを一緒に御覧になっていると)、「出でたまふべし(大殿をお訪ねしなければ)」とありつれば(と源氏が言っていたので)、人びと(供人が)声づくり(こわづくり、咳払いで合図致し)きこえて(申して)、

「雨降りはべりぬべし(雨が降りそうです)」など言ふに(などと言うと)、姫君、例の(例によって)、心細くて(源氏が出かけてしまうかと心細くなって)屈したまへり(塞ぎ込まれました)。絵も見さして(絵を見るのも止めて)、うつぶしておはすれば(うつ伏していらっしゃるのが)、いとらうたくて(とても可愛らしく)、御髪(みぐし)のいとめでたく(がとても綺麗に)こぼれかかりたるを(零れ掛かっているのを)、かき撫でて(撫でてやりながら源氏が)、

「他なるほどは恋しくやある(私が余所へ出掛けると寂しくなりますか)」とのたまへば(と仰ると)、うなづきたまふ(姫は肯かれる)。

「我も、一日も(ひとひも)見たてまつらぬは(お会い致さぬと)いと苦しうこそあれど(とても寂しくなりますが)、幼くおはするほどは(姫がまだ幼い内は)、心やすく思ひきこえて(特に問題も無く平穏なので)、まづ、くねくねしく(ひねくれて)怨むる人の(私を怨んでいる女の)心破らじと思ひて(気持ちを解そうと思って)、むつかしければ(拗れると面倒な事になって放っては置けないので)、しばしかくもありくぞ(よくこうして出歩いているのですよ)。

おとなしく見なしては(問題が無ければ)、他へもさらに行くまじ(わざわざ出掛けたりしません)。人の怨み負はじ(こうして出歩いて余所の女の機嫌を取って恨みを買うまい)など思ふも(と思うのも)、世に長うありて(この先々)、思ふさまに見えたてまつらむと(恙無く貴女をお世話したい)と思ふぞ(思えばこそなのです)」

など(などと源氏が)、こまごまと語らひきこえたまへば、さすがに恥づかしくて(姫は拗ねているのも極まり悪くて)、ともかくもいらへきこえたまはず(何とも御答え申し上げられない)。やがて御膝に寄りかかりて(其のうち源氏の膝を枕にして)、寝入りたまひぬれば(寝入ってしまったのが)、いと心苦しうて(源氏には何とも意地らしくて)、

「今宵は出でずなりぬ(今夜は出掛けない事にする)」とのたまへば(と仰ると)、皆立ちて(家人たちは心得て供人が御車を車庫に戻したりして外出の用意を取り止めて)、御膳(おもの)など

こなたに参らせたり(女房たちに夕餉の御膳を西の対に運び込ませた)。姫君起こしたてまつりたまひて(夕膳が整うと源氏は姫を起こし為されて)、

「出でずなりぬ(出掛けない事にした)」と聞こえたまへば(と御話しなされると)、慰みて起きたまへり(姫は機嫌を直して起き上がりなさった)。もろともにもものなど参る(そして一緒に夕膳を召し上がる)。いとかなげにすさびて(けれどほんの少しで止めにして)、

「さらば(ではもう)、寝たまひねかし(御眠りに成っては如何ですか)」と(と云っては源氏が出掛けないと言うのを)、危ふげに(信じきれずに)思ひたまへれば(御思いなので)、かかるを見捨てては(この健気な姫を見捨てては)、いみじき道なりとも(余程の事が在っても)、おもむきがたくおぼえたまふ(出掛けられないと源氏は御思いになる)。

かやうに(その反面、このように)、とどめられたまふ(二条院に源氏が引き止められ為さる)折々なども多かるを(事が多くなると)、おのづから漏り聞く人(次第に事情を窺い知る者が出て来て)、大殿に聞こえければ(左大臣家に伝えたので)、

「誰れならむ(誰でしょう)。いとめざましきことにもあるかな(全く目障り之上ない)」

「今までその人とも聞こえず(今まで其れらしい筋の話も無く)、さやうに(そのように)まつはし(殿に纏いついて)たはぶれなどすらむは(遊んでいるようでは)、あてやかに(上流の)心にくき人にはあらじ(一角の方では在りますまい)」

「内裏わたりなどにて(御所勤めの女房などで)、はかなく見たまひけむ人を(偶々気に入った女を)、ものめかしたまひて(分不相応に妻の座にお引き立てになって)、人やとがめむと(世間が非難するだろうと)隠したまふななり(女の素姓を殿がお隠しになっているのでしょう)。心なげに(嗜みも無く)いはけて(子供っぽいと)聞こゆるは(いう事ですから)」

など(などと左大臣家の)、さぶらふ人びとも(女房たちは)聞こえあへり(噂し合っていた)。内裏にも(やがて帝にも)、かかる人ありと聞こし召して(源氏が二条院に女を住まわせているとお耳に為されて)、

「いとほしく(困ったものだ)、大臣の思ひ嘆かるなることも、げに(尤もだ)、物気無かりし程を(ものげなかりしほどを、物心付かないうちから)、おほなおほな(何くれとなく)かくものしたる心を(良く面倒を見てくれた心遣いの程を思えば、姫を差し置いて他の女を二条院に住ませるのがその恩に背く事になるという)、さばかりのこと(其れ位の事が)たどらぬほどにはあらじを(分からないでも無いだろうに)。などか(どうして)情けなくは(そんなに心無い)もてなすなるらむ(仕打ちを出来たものか)」

と、のたまはすれど(と仰せになるが)、かしこまりたるさまにて(源氏は恐縮するばかりで)、御いらへも聞こえたまはねば(何も御答え申し上げないので)、「心ゆかぬなめり(源氏は姫と相性が悪いようだ)」と(と帝は源氏を)、いとほしく思し召す(不憫にお思い為される)。

「さるは(そうかといって)、好き好きしう(色恋めいて)うち乱れて(見境無く)、この見ゆる女房にまれ(御所の女房にしても)、またこなたかなたの人びとなど(また此方彼方の女房などとも)、

なべてならずなども(只ならぬ仲に成ったとも)見え聞こえざめるを(見聞き致さぬ所だが)、いかなるもののくまに(どういう類の女の所に)隠れありきて(忍び通いして)、かく人にも怨みらるらむ(こうまで左大臣家に怨まれているのだらう)」とのたまはず(と仰せでした)。